



アイドルを操って
いろいろする話



校内でトップクラスの美少女
同じクラスメイトの黒川悠里
手を伸ばせば届きそうな
これだけ近い距離にいるが
その正体は超人気現役アイドル

普段は僕の通う学校の生徒の数
なんてゆうに超えるほどの
人の前で活躍している
単なる一生徒の僕なんかが
関わることのできる人間じゃない
高値の花である彼女に告白するやつも
少くないが尽く振られているらしい



もちろん悠里さんは可愛いと思うし、
妄想ではいろいろとお世話に
なったこともあるから
僕も人のことは言えないけど
まあこうして同じ学校生活を
送っているだけで十分だ！



と、昨日までの僕は
本心からそう思っていた
しかし今日は違う





name
黒川悠里

とある店で購入したこのカード
気になる子の姿を思い浮かべながら対象の名前を
記入することでその子を自分の
思いのままに操ることができるらしい
どう考えても非現実的な内容だし、
半信半疑どころか全く信じられないが
購入したからには使わないわけにはいかない
今こそ、その効果の真偽を確かめるときだ



name
黒川悠里

ただのがらくただったなら
いつも通りの日常に戻るだけ
人目につく場所で試すのは悠里さんには
悪いけどもう我慢できないからね
まずは手始めにあのスカートを
たくし上げるように念じてみる...と





(これはまさか…)

(え…!? 黒川さんのパンツ見える…!?
てか見せてる!!)

(おお…!今日の俺ツいてるな…)

(にしてもその下着はエロすぎないか…?)



「ちよっ…ゆ、悠里何してんの…っ!」

「え?なに?」

「パンツ!パンツ見えてるからっ!!」

「パンツ……?」



「……え」

「私……っ……え……なんで……っ!?」

「突然変なことするからびっくりしたよ……」

「あ、あはは……ちょっと疲れてるのかも……」

（んー……今のなんだったんだろ……）

（自分からスカート捲るなんて
ことするはずなのに……）

ぽかぽか……

ぽー



(ま…まさか本物なのか?)

(今の悠里さんの行動は僕が
念じたから…?カードの効力…?)

(とにかくこういうのは
もう二度試してみないと…)

(さっきと同じようにあのスカートを
たくし上げるように念じて…)



「ちょ…!? 悠里っ! また…!!
また見えてるからっ!」

「え…!? え…ッ!?」

(やった! 今度は見れた!)

(黒川さんサービス
精神旺盛だな…ありがてえ…)

(なんで…っ!? 絶対おかしい!
何が起きてるの…っ!?)

(私の意思でやってるわけ
じゃないはずなのに…!!!)

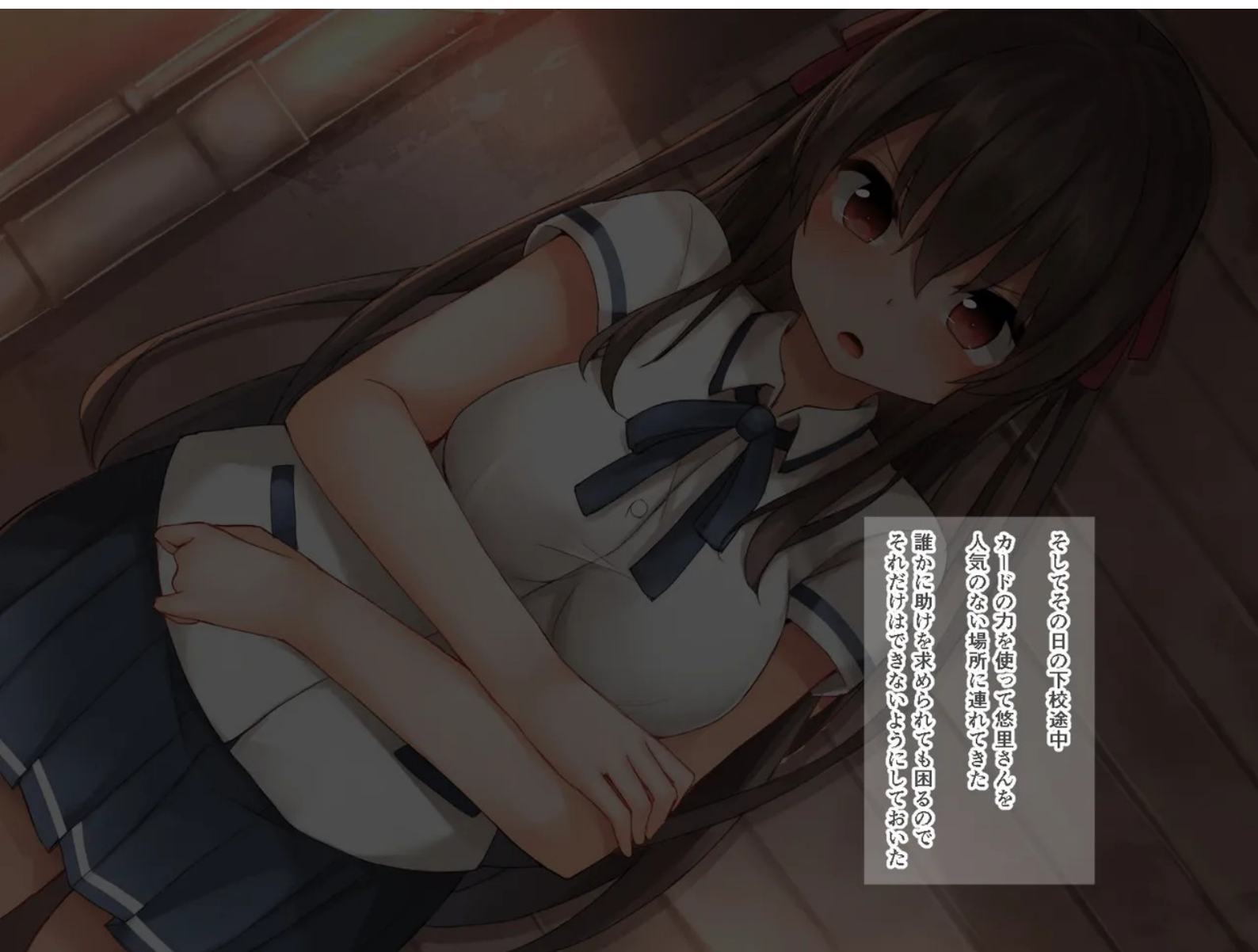


二度目の魔法を目撃して僕は確信した

この胡散臭いカードは
真正銘本物なんだと

こんなものを見せられたら
信用するしかないだろう

とんでもないものを手に入れてしまった



そしてその日の下校途中

カードの力を使って悠里さんを
人気のない場所に連れてきた

誰かに助けを求められても困るので
それだけではできないようにしておいた



「なにこれ…あんた私に何したの…!」

「誰だか知らないけどこんなこととして
許されると思ってるの…!」

（身体が言うときかないし助けを
呼ぼうとしたら声が出ないし…!）

「同じクラスなのに名前すら
覚えられてないんだね…」

「は？だってあなたに興味ないし」

（ええ…結構冷たい反応だな…）



「まあそれは置いといて一つだけ聞きたいことがあるんだけど今日不思議な体験しなかった？」

「不思議な……？」

（こいつが言ってるのってもしかしてあのときの……？）

「それ実は僕が犯人なんだよね」



「……は？」

「どうやってやったのか気になるよね？」

「だからそれを身をもって
体験してもらおうと思って…」

「ど、どうやら……っ！」

「てかあんたさっきからなに
わけわかんないこと言ってるの…!？」

「まあまあ落ち着いて…
今すぐ始めるから」



「あ、あんた何する気…?!」

「僕がなにかするんじゃないよ？
するのは悠里さんだから」

「……?!」

「まずはおっぱい見せてほしいなあ…」

「はあっ…?! 見せるわけないでしょ!!」

「そんなこと言って…」

「僕のために見せてくれるよね?」



…えっ？

「だから見せないって言ってる……っ！」
「……っ！」
「な、なんで私…脱いで……っ！」
「おおお……」

ぬ

ば



(想像上の存在だけだった
悠里さんのおっぱい……っ！)

(それが目の前にあるなんて……)

(やば……これめちゃくちゃ興奮する……)

(てか女の人の裸を生で見るのが
悠里さんなんて贅沢すぎるよなあ)



「な、なにこれ…ッ!?
私に何したのあんた…っ!」

「え? あー」応説明しとこうか?」

「って言っても実は僕は仕組みは
全くわかってないんだけど…」

「二種の催眠? みたいなものかな」

「今、悠里さんの身体は僕の
思い通りに動かせるんだよ」



「なにそれ意味わかんない……!」

「そうだよね、でも安心して? 僕も理解できてないからさ」

「まあ細かいことは気にしなくていいよ」

「とにかく悠里さんの身体の主導権は僕にあるってこと」

「それだけわかってくれば大丈夫だから」

「……っ!」



「じゃあ早速オナニーしてみようか」

「誰がそんなこと……!!」

「つて嫌がってもやらせるんだけどね」

「ちゃんとおまんこが見えるように
スカート捲ってくださいね」



「……………」

（だ、だめ！やっぱこいつの
言うことに逆らえない…!）

（嫌だ…嫌なのに私の身体が
私のものじゃないみたい…!）

「うおおおおおっ!」

「やばいやばい目に焼き付けなきゃ…」



「み、見ないで……っ！」
（誰にだって見せたことないのに
なんでこんなやつに……っ!）
「見ないでって言われても
こんなにエロいと思っちゃうよね」
「ほらちゃんと見てて
あげるからオナニーしてみてよ」
「……………」



(やだやだやだやだっ！
誰か止めて...お願い...っ！)

「んっ.....♡」

「へえ、悠里さんってこんな
感じでオナニーしてるんだ」

「くちゅくちゅえつちな音たつてきて...
もしかして見られて興奮するタイプ？」







目の前であの悠里さんが
びくびく痙攣してる
現役アイドルがイってる
姿を見られるなんて…
夢にまで見た最っつ高の光景だ…





「うん...!」

「はああああああ」

「気持ちいい...!」

「女の口の中ってぬるぬるして
暖かくて最高だ...!」

「うん...!」

「うん...!」



（苦しい……こいつ躊躇なく突っ込んで……
口の中隅々までちゃんぽに犯されてる……）
「ついさっきまであれだけ
極上なものを見せてもらってたからか
すぐにでも暴発しそうだ……」
（少しでも抵抗しようと必死に口を
動かしてるけど逆効果なんだよね）
（むしろ刺激があつて、より気持ちいい……）



(はあっ…んっ…なんで口をレイプ
されてるのに変な気持ちになっ…)
(さっき無理矢理オナニーなんて
させられたから身体がおかしくなってる…)
(ほんと最低な気分…)



(喉の締め付けだけじゃなくて
舌からの不規則な刺激がちんぽを喜ばせてくる...)

「やばいもうイきそう...」

(え...!? 待って...! ちんぽの口の中に出そうとして...!?)

「あ...い...」

(ちんぽ...びくびくして...
脈打ってるの舌に伝わってきた...!)

い
ちん
ぽ...
い

い
ちん
ぽ...
い





「はあ、気持ちよかったあ」

「あ、そうだ、注いであげた精液ちゃんと残さずに飲んでね」

「こっやって飲ませるのも一回やってみたってし」

「い、嫌よ……っ！こんな汚いの……っ！」

「だから無理だって……もう観念すればいいのに」

がっ

がっ

はー

はー

ぐん

がっ

がっ



「……………うっ…うぶ…にが……」

（喉に絡みついでる感じるし…最悪）

「おおよくできました、えらいね悠里さん」

「……もう満足したでしょ」

「いやいや全然足りないよ？」

「これからが本番ってところあるし」

「じゃあ次いつてみましょう」

うっ、
うっ、



「……絶対許さないから」

「おーこわいこわい」

「でもまあおちんぼ入れてくださ
ってポーズで言われても
全然迫力ないけどね笑」

「ほら悠里さん
おまちかねのちんぼだよ」

39 11 5









「悠里さん気持ちいい？」

「そんな粗チンで感じる
わけないでしょ……っ！」

「ええ……その言葉は
さすがの僕も傷つくなあ」

「まあでも悠里さんのおまんこは
僕を気持ちよくしてくれてるし
許してあげるよ」

（絶対気持ちよくなんてない……
こんなの平気だから……）

ズンッ

ズンッ

ズンッ

ズンッ

はぁ

んっ

はぁ

んっ



どろ

ぐ

「おお……るるる……
そろそろ中に田すよ」

「あ……♡やっ……♡
だめ……それだけはやめ……」

「今日のためにたっぷり
貯めてきたから赤ちゃん
できちゃうかもしれないね♡」

「ふふ……けないで……♡!!」

「しっかり着床するように
射精するから受け止めて……」

「やだ……やだやだやだああああ……ッッ!!」

はっ♡

はっ♡

あゐ♡

ぐ

ぬいぽん

ぽんぽん

ぐ

ぐ





「はー……中出し……最高……」
（お腹が熱くなってるの感じる……）
（ちんぽぐりぐりこすられて
精液練りつけられて……）



「ねえ悠里さん、わかってると思うけど君のファンはみんなこうやって悠里さんを犯したいって思ってるんだよ？」
「……んっ…はあはあ…」
「もちろん僕も悠里さんのファンだしこれもファンサービスの一貫だと思えばいいことしてるって思わない？」
「そんなわけないでしょ……っ！」





(膾内ザーメンちゃんぽでぐちゃぐちゃにかき混ぜられてる……！)
(気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い……！)
(あああああああああああ……！)



「あ…っ♡♡♡」
「悠里さんさっきからえっちな声出てるし
楽しめてきてるの？」
「これはちが…っ！」
「僕のちんぽで感じてくれてるんだね♡
一回目より僕のちんぽが
馴染んでる気がするよ」
「はあ…気持ち悪…っと言わな…っ」



（これだめ...身体の奥のほうから
ぞくぞくするのきてる...）
（イきたくない...
イきたくないのに...!!!）

だめ...
やめなさい

ぞく

はーん

ぞく

ぞく

はーん
はーん
はーん
はーん



「うん……」
「……お疲れ様悠里さん♡」
「そしてこれからもよろしくね」
「……はあ……はあ……」

うん
はー

ド
イ

ド
イ

ド
イ

翌日の放課後

生徒たちが帰宅したあと悠里さんには
着替えてもらい無人の教室で
動けない状態にしておいた

「あんた…どういうつもり…?」

「殺意込めた目で見つめないでよ…
何もできないって
わかっても結構怖いから笑」

「御託はいいから目的を言って」

「わかったわかった、ちゃんと
説明するから焦らないで」





「悠里さん自身わかってると思うけど
悠里さんのファンってすごく
たくさんいるんだよね」

「それで昨日の出来事をファンの
友達に話してみたら誰も
信じてくれなかったんだよ」

「だから今日は悠里さんに僕がうそつき
じゃないことを証明してもらおうと思って
その友達を連れてきました」

「は……？」



「うおお…人生で初めて裸の女の子見るのが黒川さんとか…」

「ま、まあ…俺は最初から信じてたけどな…」

「あ、あんた…な、何考えて…っ!」

「というわけでちゃんとこの二人を満足させてあげてね♥」

「ちょっ…ふざけないで…っ!」



「ほんとに何してもいいんだよな...?」
「うん、嫌がるだろうけど気にしなくていいよ」
「おっばい...っ...あの悠里たんのおっばい...」
「すっげえ...まんこぶにぶにしてでこの感触絶対忘れらんねえ...」
「ちよつと待っ...んっ...やめ...っ...♡」
「やべえやべえよまじで現実かよこれ」
「俺が黒川さんを気持ちよくさせてるなんて...」



ニギニギニ

ビク

ゴク

はあ

ん

あ

ゴク

ぬちゅ

しゅ

しゅ

「はあ...殺す...絶対殺す...」

「アイドルがそんな口悪くて大丈夫なの？ファン離れちゃうよ？」

「俺はさらに好きになっちゃうそうだけと笑」

「昨日と同じで身体全うなこと聞かないし...」

「こいつら全身を好き勝手さわってきて...」





「あーそうそう、まんこの中…指を
入れて左上のほうを刺激してあげると
悠里さんもっと喜ぶよ?」
「へえーそうなのかい?じゃあ…」
「え…ちよつと待つ…!」



「ひゅっっっ♡」
「やっっ……やめて……
そなため……えっ……♡」
（やばいやばいやば……っ！）
（さっきまではなんとか我慢
できたけどこれはほんとに……だめ……っ！）
「おおおおおっほんとだ！
急に愛液溢れてきたぞ……！」





「...もう我慢できねえよ...
俺が先でいいんだよな？」

「ああ、俺はこっち使うから」

「よし挿入れるぞ...!!」

「うそ...でしょ...?」

「(こいつら本気で...?)」

「嘘じゃないよ？」

「今日はこのために来たからね♡」



「……おっお」
「だめ……っ…」
「ふあああっ熱い…
膣内に熱いが入ってきて…」
「悠里さんのまんこで
童貞卒業できたあ…」



(嫌なはずなのに全身が
快感だけで支配されるこの感覚...)
(よくない...)
この感覚絶対よくない...っ！)
(ちんぽで突かれるたびに
意識がぐらんぐらんって揺れてる...っ)







こうして二人は交代で何度も何度も
悠里さんの身体で楽しんだ

時間も忘れて夢中になっていた
そのときのことだった

「おーい、誰かいるのか？」
もうとつくに下校時刻すぎてるぞー」

「やべっ……先生来たぞ！」

「え……これ見られたらやばくないか？」



ガラガラ...

ガラガラ...

「……ふえ……？」

「……お前ら……」

「えーつと……これはですね……」

突然の緊急事態に誰もが声を
発そうとせずしばらく沈黙が続いた

このままだと何かしらの処分を
受けざるを得ないと思つた僕は
ひとつの解決策を思いついた

「あのー先生、僕に提案があるんですが……」



先生に決定的現場を目撃された
僕はその場で先生にとある提案を申し出た
さっきまで一緒にいた友達には
帰ってもらい、今からその案を実行する
まあ、先生も男だからそういうことなんだけど

「いや～お手柄だよほんとに」

「今まで教師やってて初めてよかったと思えたぞ」

「生徒…しかもアイドルの黒川とやれるなんてな笑」

「いえいえ～それでは僕は帰りますので
先生はごゆっくりお楽しみください」

「ああ、そうさせてもらう、気をつけて帰れよ」

そうして僕は悠里さんを明け渡すことにより
どうにか事なきを得た
悠里さんごめんね、そしてありがとう





「うひひ…それじゃあ遠慮なく…」
「あいつは口なんて塞がなくても
平気だとは言ってたが「応な」
「まずはこの犯罪級なおっぱいを…」

「おお…やわっこない…毎日毎日
これだけのもの見せられて一度揉みしだいで
みたいと思ってたものだ！」

「……っ」

（なんでこんなことに……!）

（こいつ普段から私の身体を舐めるように
見てて気持ち悪いと思ってたやつ…）

（教師のくせに自分がなに
やってるのかわかってるの…!）

ばた

ん

ん

いた

ぎゅ

ぎゅ

「ほんとあいつには感謝せんとなあ…」

「この歳で若い子とやれる機会なんてないからな…とこんなじつくり楽しんでる場合じゃなかった」

「帰る時間が遅すぎると親御さんも心配するし…さっさと始めてしまおうか」

「あいつはまたいつでも好きなときにやれますよって言うておったしの」

(う、うそ…っ！ほんとに…こんなキモいおっさんと…っ！?)



「~~~~ツ~~~~ツツ!!」

「ん?何か言いたことがあるのか?
まあ話せないなら仕方ないよな」

「わしに挿入られることに期待してるのか
もうおまんこぐしょぐしょになってるぞ?」

「よし……」





びく..

「~~~~ッ!!」

「おほっ.....これは.....!!」

「やっぱり若い子は締め付けがいいのう」

「最近はめつきりだったからか
刺激を強く感じるなあ..」

びく..

スプ..

びく..
びく..



びくッ

(いやだいやだいやだいやだ...!)

「そんなに涙流してわしみたいなの
中年ちゃんぽ入れられるのが嫌なのか?」

「でもその泣き顔もかわいいのう...」

ぱちゅの
ふふふ

ぱちゅの
ふふふ

ふふ

ぱちゅの
ふふふ

びく

びく

ふ







「あー……」

「すごいすごい……まだまだ出るわ……」

「現役アイドルまんこは優秀だな」

（ああああああまだどくどく……して……）

（お腹の中精液でいっぱいになってる……）



「…………ふう」

「じゃあ今日はこれくらいにしとくか」

「またわしとたくさん楽しいことしような？」

（…………）



この日以降先生は事あるごとに悠里さんと
やらせてくれと頼んでくるようになった

とにかく学校生活の平穩は守られたみたいだ

それと同時に僕は悠里さんが自分以外の男と
セックスすることに興奮を覚えている自分に気づいた

そんな性癖を自覚した僕はこの日から
いろいろなことを試し始めた



（あいつ今度は何をやらせようとしてるの…?）

（なんの説明もないまま電車に
乗れとしか言わなかったし…）

（下着つけさせてくれなかったから
もう嫌な予感しかないけど…）

（自分の意思に反して身体が
動く感じ…慣れたくないのに
慣れ始めている自分がいる）

（とにかく今回も乗り切らなきゃ…）



すい

×_{ss}

「…………えっ」

（な、なんだこの子…お尻擦り付けてきて…
わざとなのか……っ!?）

（ぞか履いてない……っ!?）

（な、な何してんの私……っ!?
早く離れたい……けど……っ!）

（身体動かないし……とにかくこの人が
離れてくれることを祈って……）



すり

×

「あの…私と楽しいことしませんか？」

(え…こ、これまさか私の声…っ!?)

「い、いきなり何を言っ…って」

「え…まさかアイドルの黒川悠里…っ!？」

「はい、そうです、真正正銘
本物の黒川悠里です」

「そんなことより…
ほら…見てください♡」



(はあああッッ!?)

(ちょ…ちょっと待って
ほかにも人いっぱいいるのに…っ!)

「だ、だめだよこんなことしちゃ…」

「気にしないでいいんですよ?
素直になってください♥」

「私とえっちなことしたくないんですか?」

「そ、それは…」



「毎日お仕事で疲れてますよね？」

「私の身体で癒やしてあげます
これもアイドルの仕事ですからね♥」

「え…な、本当にいいのか…？」

（ドッキリとかじゃない…かな？）

（まあ少し我慢できなく
なってきたのは確か…だが）



「ふふ…♥私のお尻どうですか？」

「あんまり自信ないんですけど…」

「……………」

(ここまでされて断る
理性なんて俺にあるのか…?)



ぬっ♡

んっ♡

(いや…ないッ！)

「んっ…♡」

(…ひっ……！お尻に生暖かい感触が…)

(周りからの視線が急に強くなって…！)

(誰か…お願い誰か止めて…！)

びび

びび

びび



「……はあはあ……」

(すごい…これがアイドルの生尻……)

(ふりふりしてて…)

(ずっと触ってたくなる……)

「んっ♡んく……っ♡」

(腰掴まれてちんぽぐりぐりされてる……)

(みんな見てるのに…声漏れちゃう……っ)



びゅく

はぁあ...

くっ...出るっ...!

(ぬめぬめした気持ち悪いのが...)

はぁはぁ...

「たくさん出して
すっきりできましたか？」

うん



「……あれ？でもおちんちんは
まだ随分元気ですね」

「ああ…最近ご無沙汰だったからね…」

「じゃあもう一回しますか？」

「え……いいの？」

「はい♡もちろんです♡」

（よくない…っ！全然よくないから…ッ!!）



「はあ……♡はっ……♡」

(最初は人目気にして遠慮がちだったのに……
この人思いつきりちんぽ打ち付けてきて……!!)
(こういうときは早く
終わらせることだけを考えて……)





(さっきから心にもないことばかり勝手に……！)
(ただでさえ視線を集めてるのに……！)
(ちんぽなんて好きじゃない……！)
(気持ち悪いだけなんだから……っ！)





とある公園の公衆トイレ

悠里さんを身動きの取れない状態で男子トイレに放置した

助けを乞う悠里さんに

「最初に来た人が聖人である可能性に

賭けるくらいしか助かる方法はないかもね」

と、それだけ言い残しその場を離れた

そしてしばらく待つとお客さんがやってきた

φ出し
OK♡

ご自由に
どうぞ♡
←



!

「ふーっ……トイレ……っ」と

「……え？」

「……」

「え……なにこれ撮影かなんか？
こっぴうの遭遇したの初めてかも」

「ち、違います……！助けてください……っ！
縛られて動けなくて……！」

「あれ、違うんだ」

φ出し
OK♡

ご自由に
どうぞ♡
←



「まじでこんなことするやつっているんだな…」

「あー…じゃあすぐ解いてあげるから待ってて」

「あ、ありがとうございます…」

(良かった…最初に見つけてくれた
人が良い人で本当に良かった…!)

φ出し
OK♡

ご自由に
どうぞ♡
←



「ちよつと待つてね…これ結構きつく縛られてて…」

「ん……………」

「つかよく考えてみればこれって…」

「…どうしたんですか？そんなに解きにくいですか…？」

「いやさ……君全く身動きとれないんだよね…？」

「は、はいーそうです！だから助けを求め……!？」

φ出し
OK♡

ご自由に
どうぞ♡
←



「この目何度も見てきた…私を犯そうとしてるときの目……っ！」

「じゃあ何されても抵抗できないのかな？」

「まずい……この人絶対よくないこと考えてる……」

「ま……待って！考え直して……あなたがやろうとしていることは犯さ……」

「ごめんね、気が変わっちゃった！」

「……………」

じ
ぞ
い

「うぐっ……」

「おお…これは期待以上に気持ちいいな…」

「ぬるぬるして暖かくてやべえ…っ」

「こいつ…頭掴んで容赦なく

喉奥までちんぽ突っ込んでくる…!」

「私が動けないからってまるでオナホ扱い…」

ん
ん
ん



「いい感じだぞ…吸い付く吸い付く」

(息できなくて苦し…っ……)

(これ…さっさと
射精させないと終わらないし…)

(自分の意志するのは…
仕方なく…仕方なくだから…!)



「おほ…っ！舌でも気持ちよくしてく
くれるなんてその気になっちゃった？」

（そんなわけないでしょ…っ！）

（ただ早く終わらせるため…
それだけなんだから…！）



「く...もうまたなにかも...」
「じゃあまずは「発目」...」

ニギニギニ
ニギニニ
ニギニニ

ニギニニ
ニギニニ
ニギニニ

ん

ん

ん



ズンズンズン

グーグーグー

グーグーグー

「あー出る出るっ…」

「って…え、飲んでくれんの？」

「実は助けを求めてたのは演技だった…とか？」

「げほ…っ…ち、違う…っ！」

「私はあんたみたいな犯罪者の
精液なんて飲みたくない…！」

「これもあいつに操られて…っ！」

ガッ

ガッ

「あいつ……ううてああ、君を
ここに縛ったやつのこと」

「てかさあ悪いのは全部そいつだよ」

「なのに俺のことを犯罪者扱い
するなんて悲しいなあ」

「寛大な俺もそこまでひどいこと
言われたら罰を与えないと気が収まらないよね」

「な、何を言ってる……!!」

は
は
は



「あれ？俺のちんぽ啜えてただけで濡らしちゃったの？」

「そ、そんなわけない……っ！」

「何はともあれ準備万端みたいだし……
そろそろおまんこ味見しようかな」

「ま……待つ……！」





「ああああっ♡だめっ……」
「まだイってるっ！イってるからあ……っ！」
「うはっ……痙攣まんこやべえ……」
「うねうね動いて俺の精液欲しがってやがる……」
「やめっ……止まって……！」
「わらひ……これ以上されたらおかしくなっちゃうからあああ♡♡♡」
「ああああっ……♡ちんぽやだやだきぢやだ……♡♡♡」

ズ
ズ
出し
OK♡

ズ
ズ
どうぞ!!

が







「はぁ……はぁ……」
（もう……だめ……っ……）
イきっぱなしで頭真っ白……

はー

はー

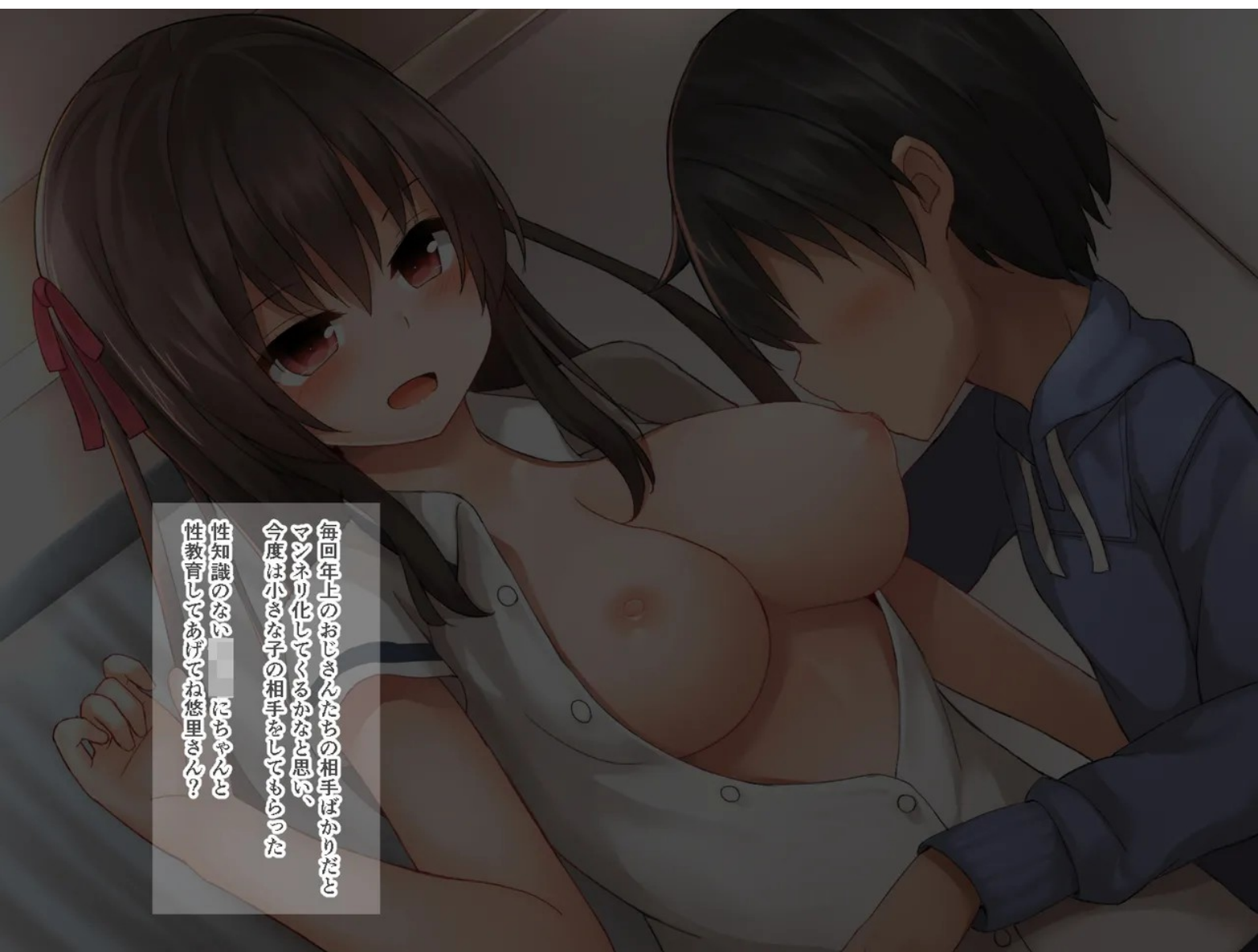
はー

出し
OK♡

ご自由に
どうぞ♡



くっ
39…



毎回年上のおじさんたちの相手ばかりだと
マンネリ化してくるかなと思い、
今度是小さな子の相手をしてみらった
性知識のない にちゃんと
性教育してあげてね悠里さん？





「ん……♡」

（赤ちゃんみたいに吸い付いてきでる…）

（これ…どうしたらいいのーっ!）

「そんな必死に吸って
お姉ちゃんのおっぱいおいしい?」

「う、うん…!」

「そう…よかった♡
好きなだけ甘えていいからね♡」



(この子おっぱいはっかり...
だから仕方ないかもだけど...)
(焦らされてるような...
物足りなく感じて...)
(って... 相手に何考えてんの私...っ!)



「ふふっ...♥私の身体で
興奮してくれるの?」

(...え、この流れは嫌な予感が...)

「なんかおちんちん...
むずむずしてきて...」

「ん?どうしたの?」

「あの...お姉ちゃん」

ぽんぽん

ぐちゃぐちゃ



ぞく

ぞく

わああああ...

「.....!!」

「顔赤くしちゃってかわいい♥」

「おっぱいちゅーちゅーして
大きくしちゃったのかあ.....♥」

「えと...これ...どうしたら.....」

「大丈夫...お姉さんに任せなさい♥」

（うそ...こんな小さな子とするの...?）



「お、お姉ちゃん...?」

「怖がらなくてもお姉ちゃんが
ちゃんとしてあげるから安心して...♥」

「じゃあ挿入れるね...」

ドキ

ドキ

ドキ

ドキ



ざぶん

ん

「んっ...」
「おちんちん全部
飲み込んだ...」

はぁ...
はぁ...



「うわ...すごい...っ
ぬるぬるに包まれて...っ」

「んっ...♥はあっ...んっ...♥」

(やば...なんで私までこんな感じで...)

「お姉ちゃん...これ...気持ちいい...」

「そう...♥よかった♥」

「君も動きたくなったら
好きに動いていいからね♥」

「うん...っ」

ぐり

ぬちゃ
ぬちゃ

ぬちゃ

ぐり

はぁ

はぁ...
はぁ...



「んっ……♡はあっ……♡んっ♡」
「上手上手♡その調子で
いっぱい気持ちよくなって……♡」
（手探り感がすごくて…
ぎゅぎゅに……っ）
（気持ちいいところに当たって…）

はあっ♡
んっ♡
んっ♡

びりっ

はーっ
はーっ
はーっ

びり

んっ♡
んっ♡
んっ♡

んっ♡
んっ♡
んっ♡



「お姉ちゃん……だめ……なんか
出ちやいそう……っ!」

「大丈夫……それ全部お姉ちゃん
のおまんこに全部出して……っ♡」

「……え……でも……っ!」

「頑張……っ♡とっておきの
気持ちいいの来るから……っ♡」

「……僕……っ……もう……!」

「……出して……っ♡いっぱち
びゅーびゅーっして……っ♡♡」





「お姉ちゃん…僕…疲れた…」
「うん♥よく頑張ったね♥」

はい、

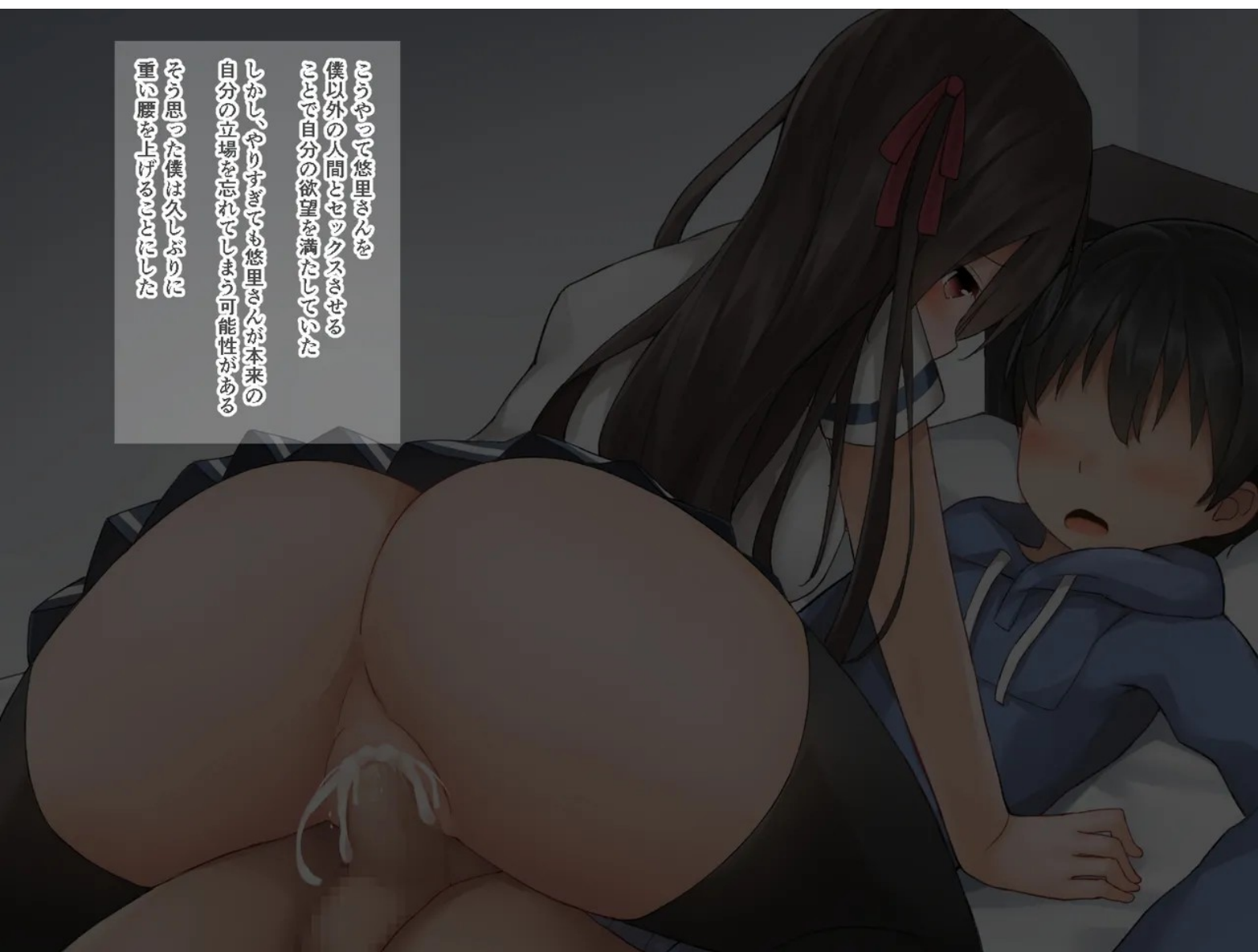
はい、

はい、

はい

お姉さん

こうやって悠里さんを
僕以外の人間とセックスさせる
ことで自分の欲望を満たしていた
しかし、やりすぎても悠里さんが本来の
自分の立場を忘れてしまう可能性がある
そう思った僕は久しぶりに
重い腰を上げることにした





今日は悠里さんとお散歩デート

嫌がる悠里さんを裸も

同然の格好で街中に連れ出した

傍から見ればどう見ても異常な光景だったが
多少は目立たないようにと
日が落ちてから実行した僕を褒めてほしい



「……っ：久しぶりに姿を見せたと
思ったら……っ：救えないやつね……」

「僕に会えなくて寂しい思い
させちゃった？ごめんね悠里さん」

「調子にのんな……！
そんなわけないでしょこのクズ！」

「おーまだ強気でいられる
なんてすごいねー尊敬しちゃうよ」

「自分で言うのもなんだけどよく
あれだけのことをされて心が折れないよね」

ぴり

ぐわぐわぐわ……

ぐわ

ぐわ……

ぐわ

ぐわ……
ぐわ……

ぐわ



「実は次は何されるんだろうって...
わくわくしてたり...」
「まあ強がつて無理してる
だけかもしれないけどね」
「...勝手に言っでなさい」
「あーあ拗ねちゃった...」
「でもこの衆人環視の中で我慢できそう？」
「...」



(なにあれ撮影...?)
(暗くてよく見えないけどすっげえかわいい...)
(隣にいるの彼氏か? そういうプレイ?)
(くっそ...もつと近くで見てえ...)



「ここ最近毎日毎日えつちなことを
され続けて全身が相当敏感に
なってると思うんだけど」
「もしここでイッたらどうなるんだろうね」
「このくらい平気だから……っ」

(周りからすごい数の視線が
突き刺さるのを肌で感じる)
(声なんて漏らしたらさらに
注目を浴びるし我慢しなきゃ)
(歩くたびにつまさきから
頭まで衝撃が駆け抜けて…)
(認めたくないけど、イけば楽になるからって
甘い誘惑に負けそうになる…)





「悠里さん頑張ってるね」
「必死な姿は好きだから応援したくなるよ」
「でもそういう子には
もっと頑張っで欲しいな」
「つてことでこれは耐えられるかな」









「あーあおもらししちゃった…」
「はあはあ…」
「うーん…さすがに目立ち
すぎたから場所変えようか」



「……………はあ…はあ」

「随分気持ちよさそうにイッてたけど大丈夫？」

「……………へ…平気…っ！」

「ふーん…見た感じ全然そうは見えないけど…」

「まあそんなことよりさ」



「ここにちんぽがあるんだけど
なにかしてほしいことない？」

「……は？なに言ってる……」

「……あれ……？なんで……」

「こいつのちんぽ……魅力的に見えてきて……」

「とにかくさっきからずっと
消えないこの疼きを止めたい……」

「(止められるなら……もう……)」



ドキ

ドキ

ドキ

はあ...
はあ...

ドキ

「...れて」

「え？」

「は、はやくそれを入れて...」

「人にものを頼むときはそれ相応の態度
じゃないと聞けないなあ...」

「.....」

「僕はもうそろそろ帰るつもりだったk...」

「ま、待って！」



「...そのお、おちんぽで私のおまんこを埋めてください...」

「うーんそこまで

言われたからには仕方ないな」

(...え！う、嘘っ...今...私自分から...っ!?)

「てことは今日は初めて

同意の上でのセックスだね♥」

(違うっ...絶対ありえない...!)

(今のもこいつに操られて...

思ってもないことを言わされて...っ!)





「あれ？もうイっちゃった？」

「悠里さんのおまんこだいぶ仕上がってるね
僕もいろいろとやってきたかいがあったよ」

（いきすぎて頭のなか真っ白になってる…）

（嫌だったはずなのに

気持ちよくてめっちゃくちゃで…）

（どれが私の本心なのかわかんないやい…）

（もう…どうなってもいいや…）



「もっと突いて…ぐちゃぐちゃにしてえ…♥」
「おちんぼですぼすぼされるの好きなのお…♥」
「やっと悠里さんから求めてくれたね」
「ちゃんと応えてあげるから安心して♥」



あああああ
あああああ

はーっ

どろろ

はーっ

どろろ

どろろ

「あひっ♥出てるう…っ♥おまんこに
熱いの注がれてイッてる…っ♥」

「ああああああ♥♥
はあっ…はあ…っ♥」

(精液注がれて何も考えられない
くらいイッたのにまだ足りない…)

(まだ…全然疼きが止まんない…)

どろろ
どろろ

どろろ
どろろ



はあ...

はあ...

はあ...

「悠里さん物欲しそうな顔
してるけど続けてほしい？」

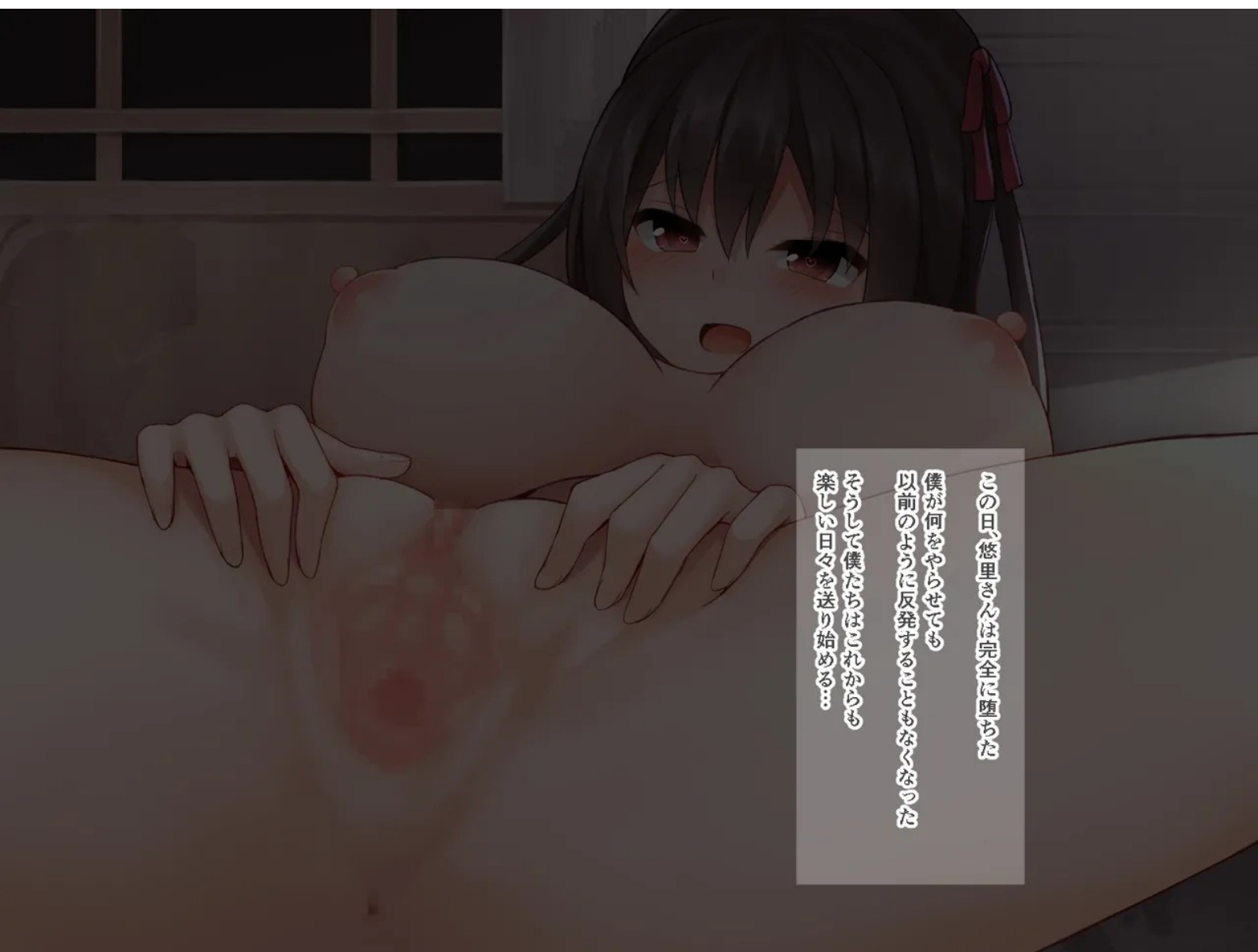
「気持ちいいのやってくれるの...？」

「もちろんだよお望み通りいっぱい
気持ちよくしてあげるからね♥」

「ふえへへ...やったあ.....♥」

ふく

ふく



この日、悠里さんは完全に堕ちた
僕が何をやらせても
以前のように反発することもなくなった
そうして僕たちはこれからも
楽しい日々を送り始める…